

富山新聞



富山市から常願寺川の富立大橋を渡ると、舟橋村の入り口のところに「高平メモリアル常願寺スポーツパーク」がある。スポンサー企業名を記した看板が並び、印象的である。

人工芝コート

「プロで使われるものと同じ仕様の看板です」。常願寺川公園スポーツクラブのマネージャー安田量さん(37)が語る。常願寺スポーツパークは昨年7月にオープンした。県内に人工芝のサッカー・フルコートが四つあるうち、民間クラブのもの

第3章 教育村の力 民間クラブ

自慢の「ホーム」育て

のはこだけだ サッカーの練習・試合を中心に、陸上競技の

相乗効果を生み出す

練習も行われ、月延べ5千人が利用する。

「高平メモリアル」の言葉には、昨年3月、完成を見ずに急逝した高平公園元県議会議員の遺志が込められている。高平さんは2005年の富立大橋完成に尽力し、「橋がつながり、人のつながりも生もう」と10年にクラブを創設した。

「村には陸上競技場や運動公園がない。その役割を私たちが果たしていければ」と安田さんは語る。今の時代を象徴する言葉かもしれない。

学校の運動部活動が教員の過重負担につながっているとの指摘を背景に、スポーツ庁は5月

に有識者会議を開き、「スポーツクラブの指導者を活用すべきだ」などの意見が出ている。常願寺スポーツパークでは月2回程度、雄山高(立山町)のサッカー部の指導を実施。村の文化スポーツクラブ「バンドリ」などと連携し、地方創生に貢献したい考えだ。

学校、図書館、地域の大人、



プロ仕様の「ピッチ看板」が印象的な常願寺スポーツパーク

算数を教える食堂、YMCA、民間スポーツクラブ…多彩な力をミックスして「教育の相乗効果」を生む視点が重要ではないか。

常願寺スポーツパークでは今冬、クラ

「わが家のように出入りできる仕掛けをしたい。ホームグラウンドがあることを誇りに思っしてほしい」。自慢のホームグラウンドに育てば、地域住民の「成長の場」として心強い。スポーツに励む子どもが親になった時、「このグラウンドがあるから、ここに住む」という流れをつくるのが安田さんの夢だ。

わが家のように

子どもたち、そして、大人が大きな夢を描けるのが教育村ではないか。幅広い人々が「橋」でつながれば、教育力はさらに増すはずである。(宮本南吉) Ⅱ第3章おわり。引き続き「まとめ」を掲載しますⅡ